

生涯スポーツにつながる小学校、中学校、高等学校の体育カリキュラムの研究 (第I報) —スポーツの楽しさを重視した授業を目指して— (生徒のアンケート分析から)

はしもと よしゆき なが はま あきこ
橋本 剛幸*・永浜 明子**

*近畿大学附属和歌山高等学校中学校・**実践学校教育講座

(平成24年8月29日 受付)

本研究は、生涯スポーツへつながる学校教育の中の体育の役割を検討し、校種間の連携のとれたよりよいカリキュラムを提案し、今後のよりよい体育科教育のあり方を考えることを目的としている。その第I報として、生徒へのアンケート調査と分析を行い、カリキュラム作成上の注意点を明確にした。その結果、学校体育において、早い時期からさまざまなスポーツを経験させ、そのつながりを明確化させることが必要であり、選択授業などのスポーツの楽しさや爽快感を感じるような楽しい体育の授業を行うこと、体力や運動能力を上げるためのトレーニングを行うことの両方をうまく組み入れたカリキュラム作成の重要性が示唆された。

キーワード：生涯スポーツ、楽しい体育、校種間連携

I 背景および目的

わが国では、高齢化が進み、医療費の高騰が社会問題となっている。人は誰もが病気にならず、健康で永く生きることを望んでいるが、時間、場所、費用など問題も多く、健康を維持していくための取り組みを毎日の生活の中で行っていないのが現実である。生涯スポーツという言葉どおり、健康を維持するために年をとってもスポーツを楽しんでいくことは理想であるが、現実には、ウォーキングやジョギングを行う人たちをよく見かけるが、仲間とともにバレーボールやバドミントン、野球やサッカーなどを楽しむとなると、なかなか難しい。もちろん、ウォーキングやジョギングは、健康維持のための運動として有効であるが、一人で永く続けていこうとするとなかなかうまくいかないものである。やはり、仲間とともに楽しみながらスポーツをしていくことが、長続きさせる方法のひとつである。

わが国では、誰もが簡単にスポーツを楽しむといった土壌が整っておらず、健康に不安を覚えたときに、ウォーキングやジョギングなどを始めることが多い。誰もが簡単にスポーツを楽しむためには、時間に余裕があり、場所がきちんと提供され、費用が余りかからず、同じ考えを持つ人たちが集まって初めて成り立つのだが、そのようないわゆるコミュニティスポーツはまだまだ少なく、一般的ではない。また、やはり一番大事なのは、そのスポーツをやりたいと思う気持ちなのだが、そこにも大きな問題がある。スポーツには、それぞれの特性があり、その中に面白さがある。その面白さを知り、またやってみたいと感じることが必要であり、そのようなモチベーションを育てるのは、学校教育の中の体育の役割であるが、現実の学校体育は、その役割を十分に果たしていない。スポーツの楽しさを体験し、またやってみたいという気持ちが強ければ、自分たちで仲間を集めてスポーツをしようという行動も起こってくる。環境を整えることも必要だが、学校体育の役割は、動機づけにさらに重点がおかれるべきである。

現在、本校(近畿大学附属和歌山高等学校・中学校)のような中学校・高等学校6年間一貫教育の学校が、公立学校でも増えてきている。6年間一貫教育の学校において、体育の授業カリキュラムではそれぞれの発達段階に応じてさまざまなスポーツが取り入れられているものの、中学・高校と連携して生涯スポーツにつな

るカリキュラムが組まれているところはほとんどない。深野、入江、小澤、合田らは、筑波大附属駒場中学校・高等学校において、長年にわたり生徒たちのスポーツテストのデータを分析して、体力や運動能力の観点を中心とした、中高6年間の体育のカリキュラムを研究している[1]～[12]。近年の子どもたちの運動能力や体力の低下は著しく、教師は基礎的な筋力や基本的な動きを指導することに時間がとられ、スポーツの楽しさを教えることが難しくなっている。もちろんスポーツを行ううえで、体力や運動能力をつけることは大変重要ではあるが、生徒の楽しさを重視した体育の授業と生涯スポーツにつながる生徒の意識に関する研究はなされていない。まして、6年一貫教育でなく、一般的な公立中学や高校では連携したカリキュラムを作るには様々な課題があり、非常に難しい。さらに小学校の体育では、生涯スポーツにつながるような内容や中学・高校で行う種目の運動能力や体力づくりに視点を置いた内容の授業は、教員の意識や技術不足などから十分にできていないのが現状である。後藤、山本らは小学校児童のスポーツ享受能力として、楽しさを創意工夫する力、スポーツにかかわろうとする意欲、スポーツに親しむ最低限度の技能の3つをあげ、それらを伸ばすような学習が生涯スポーツ時代に向けて必要だとしている[13]。

このような状況の中で学校を卒業した後、継続してスポーツに親しんでいくような意識は低く、健康に不安を覚えたり、ストレスを解消するために身体活動やスポーツを再開するケースが多いと言えよう。まさに、学校体育とコミュニティスポーツあるいは生涯スポーツの分断が生じているのである。この分断に、現在の日本の学校教育と生涯教育が抱える、「切り離された教育」の一端を垣間見ることができる。学校体育における意識づけ、学校体育からコミュニティスポーツへのスムーズな移行、学校と地域との連携、これらが整わなければ、学校体育およびコミュニティスポーツの本来の目的・役割は果たし得ないと言っても過言ではない。スポーツの楽しさを体験し、将来子どもたち自らがコミュニティスポーツにおいて一生懸命と親しむためには小学校から高校までの体育が重要な役割を果たしているのはいうまでもなく、人の健康を生涯通じて考えるためには、学校間及び地域の連携が不可欠である。

本研究は、コミュニティスポーツへのスムーズな参加を阻害する小学校から高等学校のカリキュラムの課題、スムーズな連携がなされるための方策を研究し、提言することを大きな目的とする。提言の際には、小学校から中学校、中学校から高等学校、さらに高等学校から卒業後のコミュニティスポーツへつながる無駄のないカリキュラムを作成、提案する。そのため、①小学校、中学校、高等学校における体育の授業カリキュラムを調査②児童・生徒たちに対する過去の運動経験などに関する意識調査③教員に対する児童・生徒の問題点に関する調査の3方向から、それぞれの目的に沿って調査・検討を行い、本研究の目的を達成する。その第I報として、自らスポーツを選んで行う、選択授業を行っている高校3年生を対象に、現在までの体育の授業の内容、それに対する満足度・問題点、将来続けていきたいスポーツなどについてアンケート調査を行い、体育の授業のあり方や問題点を明らかにすると共に、高等学校卒業後、自身の健康を踏まえ、コミュニティスポーツへ参加していくことのできる土壌（興味、技術、体力など）が備わっているかを検証する。また、児童・生徒たちに対する過去の運動経験などに関する意識調査から、年齢に適したスポーツ、運動能力、体力などをいかに身につければ、生涯スポーツにつながっていくか、学校教育体育へどう組み込むかを検討し、その重要性を提言する。

II 生徒意識調査（近畿大学附属和歌山高等学校）

1. 目的

本校（近畿大学附属和歌山高等学校）では、十数年前より3年次の体育の授業に選択制を導入している。2年次までは、全員が同じ種目を行なう一斉授業を行い、それらの種目を中心に3年次では前期、後期の2回に分けて、各1種目を選択し、生徒たちができる限り自主的にそのスポーツを楽しめるように、準備やゲーム運営を行なっている。施設や教員数を考慮し、男子はサッカー、ソフトボール、バドミントン、テニス、卓球・トレーニングの5種目、女子はソフトボール、バドミントン、テニス、卓球・トレーニングの4種目の中から前期に1種目、後期に1種目の計2種目を選択する。できる限り本人の希望種目が実施できるようにしているが、ひとつの種目に希望が集中した場合は、第二希望となることもある。その際には、後期では必ず希望の種目が行えるように配慮している。

高等学校卒業後、自身の健康を踏まえ、生涯スポーツへつながることのできる土壌（興味、技術、体力など）が備わっているかを調査するため、この選択授業を受けた生徒たちを対象に、アンケート調査を行った。

2. 方法

a. 対象

対象は、近畿大学附属和歌山高等学校3年生、400名（男子212名、女子188名）で、10クラス編成のうち、4クラス、158名（男子72名、女子86名）が本校中学校からの内部進学生（中等部）で、残りの6クラス、242名（男子140名、女子102名）が公立中学などから本校へ入学してきた外部入学生（高等部）であった。

b. 実施期間

後期の選択授業の終盤である、2010年12月に実施した。

c. 内容

現在までの体育の授業の内容、それに対する満足度・問題点、将来続けていきたいスポーツについてなどのアンケート調査を行った。アンケートについては無記名とし、クラス（10クラス）ごとに回収した。

d. 分析方法

集計は、中等部と高等部ではクラブ活動やスポーツに対する意識の違いがあると考え、別々に行なった。項目ごとに人数を集計し、全体人数に対する割合を計算し、まとめた。自由記述については、同じ内容のものを整理した。

3. 結果

352名（中等部男子65名、高等部男子125名、中等部女子77名、高等部女子85名）から回答を得た。回答率は88.0%であった。以下、各質問項目について結果を述べる。

I. 選択授業は楽しかったですか

この問いに対する回答の結果を表1に示した。

全体では前期で87.5%（308名）、後期では86.6%（305名）の生徒が「とても楽しかった」「まあ楽しかった」と回答していた。一方、「あまり楽しくなかった」「まったく楽しくなかった」と答えた生徒は、前期の中等部女子で9.1%（7名）、後期の高等部男子で9.6%（12名）であった。選択種目を見てみると、前期の中等部女子（7名中）では、バドミントン4名、ソフトボール1名、テニス1名、卓球・トレーニング1名で、後期の高等部男子（12名中）では、サッカー3名、ソフトボール2名、バドミントン3名、卓球・トレーニング4名となっていた。

II. その理由はなぜですか

この問いに対する回答の結果を、表2-1、表2-2、表2-3、表2-4に示した。

楽しかった理由として、「選択した種目への興味」がどのグループでも多くなっていた。また、その他の意見では、「友人との関係」をあげている生徒が男子で3.0%（10名）、女子で7.4%（21名）あった。

楽しくなかった理由としては、「第一希望が通らなかったこと」が原因である生徒が多く、その他の意見では、「思っていたほどおもしろくなかった」「ゲームのやり方」「トレーニングがあまり自由にできなかった」などがあげられていた。

III. 前期あるいは後期に選択したスポーツを卒業後、またやってみたいですか

この問いに対する回答の結果を表3に示した。

「ぜひやりたい」「機会があればやりたい」と回答した生徒は、全体の78.1%（275名）であった。一方、「あまりやりたくない」「まったくやりたくない」と答えた生徒は、全体の8.3%（19名）で、特に中等部女子に

多かった (18.2% ,14名)。

表1 「I. 選択授業は楽しかったですか」に対する回答

	男子						女子						総計		
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計				
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	
前期	1. とても楽しかった	45	69.2	72	57.6	117	61.6	46	59.7	58	68.2	104	64.2	221	62.8
	2. まあ楽しかった	16	24.6	35	28.0	51	26.8	17	22.1	19	22.4	36	22.2	87	24.7
	3. 普通	4	6.2	13	10.4	17	8.9	7	9.1	7	8.2	14	8.6	31	8.8
	4. あまり楽しくなかった	0	0	4	3.2	4	2.1	5	6.5	1	1.2	6	3.7	10	2.8
	5. 全く楽しくなかった	0	0	1	0.8	1	0.5	2	2.6	0	0	2	1.2	3	0.9
	計	65	100	125	100	190	100	77	100	85	100	162	100	352	100
後期	1. とても楽しかった	49	75.4	69	55.2	118	62.1	56	72.7	51	60.0	107	66.0	225	63.9
	2. まあ楽しかった	14	21.5	30	24.0	44	23.2	15	19.5	21	24.7	36	22.2	80	22.7
	3. 普通	1	1.5	14	11.2	15	7.9	5	6.5	10	11.8	15	9.3	30	8.5
	4. あまり楽しくなかった	1	1.5	10	8.0	11	5.8	0	0	3	3.5	3	1.9	14	4.0
	5. 全く楽しくなかった	0	0	2	1.6	2	1.1	1	1.3	0	0	1	0.6	3	0.9
	計	65	100	125	100	190	100	77	100	85	100	162	100	352	100

表2-1 「II. その理由はなぜですか」に対する、前期の1. あるいは2. と回答した生徒の理由

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. 選択した種目が好きだから	36	59.0	62	57.9	98	58.3	20	31.7	29	37.7	49	35.0	147	47.7
2. 身体を動かすのが好きだから	17	27.9	24	22.4	41	24.4	18	28.6	24	31.2	42	30.0	83	26.9
3. ストレス解消ができたから	11	18.0	21	19.6	32	19.0	27	42.9	22	28.6	49	35.0	81	26.3
4. その他	3	4.9	4	3.7	7	4.2	6	9.5	6	7.8	12	8.6	19	6.2

(注) 1, 2は前質問項目の「1. 楽しかった」「2. まあ楽しかった」の選択番号を指す。以降の表についても同様とする

表2-2 「II. その理由はなぜですか」に対する、前期の4. あるいは5. と回答した生徒の理由

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
1. 身体を動かすのが嫌いだから	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2. しんどかったから	0		1	20.0	1	20.0	1	14.3	0	0	1	12.5	2	15.4
3. 希望する種目ではなかったから	0		2	40.0	2	40.0	1	14.3	1	100	2	25.0	4	30.8
4. その他	0		2	40.0	2	40.0	5	71.4	0	0	5	62.5	7	53.8

表2-3 「II. その理由はなぜですか」に対する、後期の1. あるいは2. と回答した生徒の理由

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. 選択した種目が好きだから	31	49.2	53	53.5	84	51.9	25	35.2	25	34.7	50	35.0	134	43.9
2. 身体を動かすのが好きだから	14	22.2	25	25.3	39	24.1	17	23.9	22	30.6	39	27.3	78	25.6
3. ストレス解消ができたから	15	23.8	21	21.2	36	22.2	27	38.0	21	29.2	48	33.6	84	27.5
4. その他	5	7.9	5	5.1	10	6.2	9	12.7	9	12.5	18	12.6	28	9.2

表2-4 「II. その理由はなぜですか」に対する、後期の4. あるいは5. と回答した生徒の理由

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
1. 身体を動かすのが嫌いだから	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2. しんどかったから	0	0	4	33.3	4	30.8	1	100	0	0	1	25.0	5	29.4
3. 希望する種目ではなかったから	1	100	3	25.0	5	38.5	0	0	1	33.3	1	25.0	6	35.3
4. その他	0	0	7	58.3	7	53.8	0	0	1	33.3	1	25.0	8	47.1

表3 「Ⅲ. 前期あるいは後期に選択したスポーツを卒業後、またやってみたいですか」に対する回答

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. ぜひやりたい	18	27.7	41	32.8	59	31.1	14	18.2	21	24.7	35	21.6	94	26.7
2. 機会があればやりたい	40	61.5	56	44.8	96	50.5	39	50.6	46	54.1	85	52.5	181	51.4
3. わからない	6	9.2	20	16.0	26	13.7	10	13.0	12	14.1	22	13.6	48	13.6
4. あまりやりたくない	0	0	7	5.6	7	3.7	5	6.5	3	3.5	8	4.9	15	4.3
5. まったくやりたくない	1	1.5	1	0.8	2	1.1	9	11.7	3	3.5	12	7.4	14	4.0
計	65	100	125	100	190	100	77	100	85	100	162	100	352	100

IV. 体育系クラブに所属していましたか

この問いに対する回答の結果を、表4に示した。

中等部（内部進学生）では中学校でクラブに所属していた男子は49.2%（32名）、女子は41.6%（32名）と半数を下回っていた。さらに、高校で所属している男子は27.7%（18名）、女子は28.6%（19名）と、中学校で所属していた人数より低い値であった。高等部においては、中学校でクラブに所属していた生徒は、男子で74.4%（93名）、女子で61.2%（52名）であるのに対し、高校になると、男子で30.4%（18名）、女子で22.4%（11名）と、こちらも中学校で所属していた人数より低い値であった。

V-①. 体育系クラブに所属していた人 そのスポーツを大学へ行ってもサークルやクラブでやるつもりですか

この問いに対する回答の結果を表5-1に示した。

V-②. 体育系クラブに所属していなかった人または上記V-①. で2.または3.と答えた人 大学へ行ってサークルやクラブで何かスポーツをやるつもりがありますか

この問いに対する回答の結果、すなわち、高等学校で体育系クラブに所属していなかったか、所属していたけれどそのクラブを大学で続けない生徒に対して、クラブやサークルでスポーツをする意思があるかどうかの質問に対する回答の結果を表5-2に示した。

上記V-②. で、1.と答えた人 何をやるか決めていますか

この問いに対する回答の結果、すなわち、新たにやろうとしているスポーツを決めているかという質問に対する回答の結果を表5-3に示した。

上記の3つの質問は、回答者限定の質問となっているが、割合については全人数（男子中等部65名、高等部125名、計190名、女子中等部77名、高等部85名、計162名、総計352名）から算出した。

本校の場合、卒業生ほぼ全員が大学進学するため、そのうちの38.9%（137名）が大学で体育系のクラブやサークルに入ることを希望していることになる。

今までのクラブを続ける生徒、すでに何をやるかを決めている生徒は、男子で33.2%（63名）、女子で27.1%（44名）おり、何かやりたいがまだ決めていない生徒も男子で20.5%（39名）、女子で24.1%（39名）となっていた。

表4 「Ⅳ. 体育系クラブに所属していましたか」に対する回答

	男子						女子						総計		
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計				
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	
中 学	1. 所属していた	32	49.2	93	74.4	125	65.8	32	41.6	52	61.2	84	51.9	209	59.4
	2. 所属していなかった	33	50.8	32	25.6	65	34.2	43	55.8	33	38.8	76	46.9	141	40.1
	計	65	100	125	100	190	100	75	97.4	85	100	160	98.8	350	99.4
高 校	1. 所属していた	18	27.7	38	30.4	56	29.5	22	28.6	19	22.4	41	25.3	97	27.6
	2. 所属していなかった	46	70.8	87	69.6	133	70.0	51	66.2	66	77.6	117	72.2	250	71.0
	計	64	98.5	125	100	189	99.5	73	94.8	85	100	158	97.5	347	98.6

表5-1 「V-①. 体育系クラブに所属していた人 そのスポーツを大学へ行ってもサークルやクラブでやるつもりですか」に対する回答

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. やるつもりだ	12	18.5	32	25.6	44	23.2	7	9.1	17	20.0	24	14.8	68	19.3
2. やらないつもりだ	9	13.8	26	20.8	35	18.4	10	13.0	20	23.5	30	18.5	65	18.5
3. まだ分からない	19	29.2	32	25.6	51	26.8	15	19.5	13	15.3	28	17.3	79	22.4

表5-2 「V-②. 体育系クラブに所属していなかった人 または上記V-①. で2. または3. と答えた人 大学へ行ってサークルやクラブで何かスポーツをやるつもりがありますか」に対する回答

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. やるつもりだ	16	24.6	21	16.8	37	19.5	17	22.1	15	17.6	32	19.8	69	19.6
2. やらないつもりだ	6	9.2	21	16.8	27	14.2	13	16.9	17	20.0	30	18.5	57	16.2
3. まだ分からない	23	35.4	40	32.0	63	33.2	33	42.9	29	34.1	62	38.3	125	35.5

表5-3 「上記V-②. で、1. と答えた人 何をやるか決めていきますか」に対する回答

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. 決めている	4	6.2	15	12.0	19	10.0	4	5.2	16	18.8	20	12.3	39	11.1
2. 決めていない	17	26.2	22	17.6	39	20.5	20	26.0	19	22.4	39	24.1	78	22.2

VI. 今後、大学や社会人になってスポーツをしていこうと思いますか

この問いに対する回答の結果を表6に示した。

VII. その理由はなぜですか

この問いに対する回答の結果を表7-1と表7-2に示した。

「今後、大学や社会人になってスポーツをしていこうと思いますか」という問いに対して、「絶対にしていこうと思っている」「少ししていこうと思っている」と答えた生徒は、男子で63.7% (121名)、女子で60.4% (98名)、全体では62.2% (219名)であった。

スポーツをする理由については、全体で「健康のため」が44.7% (98名)と最も多く、続いて「身体を動かすのが好きだから」39.7% (87名)、「ストレス発散のため」30.6% (67名)となっていた。特に、女子において、同じ理由順で52.0% (51名)、39.8% (39名)、30.6% (30名)となっており、その次に「ダイエットのため」が27.6% (27名)であった。

一方、スポーツをしない理由を見てみると、「他にやりたいことがあるから」45.7% (16名)、「めんどくさいから」31.4% (11名)、「時間的に無理だと思うから」22.9% (8名)が上位になっていた。

表6 「VI. 今後、大学や社会人になってスポーツをしていこうと思いますか」に対する回答

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. 絶対にしていこうと思っている	16	24.6	25	20.0	41	21.6	12	15.6	14	16.5	26	16.0	67	19.0
2. 少ししていこうと思っている	24	36.9	56	44.8	80	42.1	34	44.2	38	44.7	72	44.4	152	43.2
3. 分からない	19	29.2	33	26.4	52	27.4	20	26.0	22	25.9	42	25.9	94	26.7
4. あまりしていこうと思っていない	2	3.1	6	4.8	8	4.2	5	6.5	10	11.8	15	9.3	23	6.5
5. まったくしていこうと思っていない	1	1.5	4	3.2	5	2.6	6	7.8	1	1.2	7	4.3	12	3.4
計	62	95.4	124	99.2	186	97.9	77	100	85	100	162	100	348	98.9

表7-1 「Ⅶ. その理由はなぜですか」に対する1.あるいは2.と回答した生徒の理由

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. 健康のため	13	32.5	34	42.0	47	38.8	27	58.7	24	46.2	51	52.0	98	44.7
2. ダイエットのため	2	5.0	4	4.9	6	5.0	12	26.1	15	28.8	27	27.6	33	15.1
3. ストレス発散のため	12	30.0	25	30.9	37	30.6	11	23.9	19	36.5	30	30.6	67	30.6
4. 友達作りのため	8	20.0	4	4.9	12	9.9	5	10.9	5	9.6	10	10.2	22	10.0
5. 身体を動かすのが好きだから	18	45.0	30	37.0	48	39.7	17	37.0	22	42.3	39	39.8	87	39.7
6. その他	2	5.0	5	6.2	7	5.8	1	2.2	0	0	1	1.0	8	3.7

表7-2 「Ⅶ. その理由はなぜですか」に対する4.あるいは5.と回答した生徒の理由

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. 身体を動かすのがいやだから	0	0	3	30.0	3	23.1	3	27.3	0	0	3	13.6	6	17.1
2. めんどくさい(じゃまくさい)から	1	33.3	4	40.0	5	38.5	3	27.3	3	27.3	6	27.3	11	31.4
3. 人と接するのが苦手だから	1	33.3	1	10.0	2	15.4	2	18.2	0	0	2	9.1	4	11.4
4. 他にやりたいことがあるから	3	100	2	20.0	5	38.5	6	54.5	5	45.5	11	50.0	16	45.7
5. 時間的に無理だと思うから	1	33.3	1	10.0	2	15.4	3	27.3	3	27.3	6	27.3	8	22.9
6. その他	1	33.3	2	20.0	3	23.1	0	0	2	18.2	2	9.1	5	14.3

Ⅷ. 選択授業をやってみて、あるいは今後のことを考えて、今までにこうしておけばよかったと思うことはありますか

この問いに対する回答（表8）では、「もっと身体を動かしておけばよかった」と「筋力をつけておけばよかった」が同じ割合の22.7%（80名）であり、一番多くなっている。

表8 「Ⅷ. 選択授業をやってみて、あるいは今後のことを考えて、今までにこうしておけばよかったと思うことはありますか」に対する回答

	男子						女子						総計	
	中等部		高等部		計		中等部		高等部		計			
	(人)	(%)												
1. もっと真剣に体育の授業をしておけばよかった	6	9.2	5	4.0	11	5.8	1	1.3	3	3.5	4	2.5	15	4.3
2. 体育系クラブに所属しておけばよかった	14	21.5	13	10.4	27	14.2	8	10.4	18	21.2	26	16.0	53	15.1
3. もっと身体を動かしておけばよかった	7	10.8	29	23.2	36	18.9	24	31.2	20	23.5	44	27.2	80	22.7
4. 筋力をつけておけばよかった	21	32.3	21	16.8	42	22.1	18	23.4	20	23.5	38	23.5	80	22.7
5. 小さいころにもっと外で遊んでおけばよかった	5	7.7	11	8.8	16	8.4	8	10.4	4	4.7	12	7.4	28	8.0
6. その他	3	4.6	2	1.6	5	2.6	1	1.3	2	2.4	3	1.9	8	2.3

Ⅸ. 小学校、中学校、高校時代の体育の授業でこんなことをしておいてほしかったと思うことを自由に書いてください

この問いに対する回答の結果を表9-1, 9-2, 9-3に示した。

高校3年生になって、過去12年間の学校における体育の授業を振り返って、してほしかった内容は多岐にわたっていた。特に小学校に対するものが多いように思うが、その中で注目すべきは、先ほどの「Ⅷ. 選択授業をやってみて、あるいは今後のことを考えて、今までにこうしておけばよかったと思うことはありますか」に対する回答でも出てきた、基本的な運動能力や体力に関する取り組みであった。その内容として、「基本的技術」「体操」「ストレッチ」「基礎的体力づくり」「体力UPシステム」「筋トレ」「体力づくり」「柔軟体操」「基礎体力」などがあつた。また、「多くの運動」「いろんな球技」「運動が好きになるもの」「幅広い球技」「団体スポーツ」「体育をもっと」「いろんな競技」などの意見あつた。中学校、高校についての意見では、どちらかといえば具体的な種目の希望が出てきていた。

表9-1 「Ⅸ. 小学校、中学校、高校時代の体育の授業でこんなことをしておいてほしかったと思うことを自由に書いてください」の問いに対する回答（小学校）

中等部男子	高等部男子	中等部女子	高等部女子
基礎的技術 基礎的体力づくり (2) スポーツテスト 体力UPシステム 体操 ストレッチ 縄跳び 多くの運動 いろんな球技 リレー 相撲 水泳 卓球 野球 (3) バスケット (2) サッカー (3) (ドッジしすぎ)	筋トレ (3) 体力づくり 運動が好きになるもの マラソン いろんなスポーツ (2) 幅広い球技 団体スポーツ ドッジ 野球 (2)	体育をもっと (2) いろんな球技 (3) いろんな競技 水泳 ダンス (2) バレー	基礎体力 柔軟体操 (2) 球技 (2) ドッジ サッカー (2) バレー バスケ (3)

表9-2 「Ⅸ. 小学校、中学校、高校時代の体育の授業でこんなことをしておいてほしかったと思うことを自由に書いてください」の問いに対する回答（中学校）

中等部男子	高等部男子	中等部女子	高等部女子
基礎体力 トレーニング (2) 縄跳び 球技 (3) 水泳 (2) 空手 野球 (2) サッカー (4) ソフト (3)	身体づくり 筋トレ (2) 選択授業 幅広い球技 (2) 水泳 サッカー (3) バドミントン 野球 (3) キックベースボール ドッジ (2) ハンドボール	体力を計画的につけるカリキュラム 筋力トレーニング (2) 柔軟 水泳 大縄 鉄棒 バレー (2) ドッジ (2)	基礎体力トレーニング 縄跳び 誰もができるスポーツ 球技 (3) バレー キックベースボール ドッジ バドミントン サッカー バスケット (2)

表9-3 「Ⅸ. 小学校、中学校、高校時代の体育の授業でこんなことをしておいてほしかったと思うことを自由に書いてください」の問いに対する回答（高校）

中等部男子	高等部男子	中等部女子	高等部女子
基礎体力 縄跳び 球技 (2) 柔道 野球 (2) バスケット (3) サッカー (3) ソフト (2)	筋トレ 幅広い球技 ストレス発散種目 水泳 (2) キックベースボール 野球 (3) バスケ (2) ドッジ サッカー (3)	水泳 (2) ダンス (3) サッカー 野球	団体スポーツ 球技 (2) 跳び箱 水泳 バレー ハンドボール バスケ (2) ドッジ バドミントン テニス サッカー

4. 考察

学校教育の体育の目的は、児童・生徒の体力や運動能力の向上はもちろんのこと、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することにある。新学習指導要領の中においてもそれを踏まえ、次の4つの課題を改善するためにさまざまな取り組みがなされている[14]。

- ・運動する子どもとそうでない子どもの二極化が進んでいること
- ・子どもの体力の低下傾向が依然深刻であること
- ・運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、生

涯にわたって運動に親しむ資質や能力が十分に図られていない例も見られること

・学習体験のないまま領域を選択していること

今回のアンケートを、以上の4つの課題と照らし合わせると、その重要性が理解できる。

1つ目の二極化の問題についてである。最近、全国的にも中学生、高校生の体育系クラブの人数が少なくなってきた[15]、本校においても同傾向にある。本校の場合、中等部生徒の入部人数が少なく（男子27.7%，18名，女子28.6%，22名），また高等部においても中学では行っていた（男子74.4%，93名，女子61.2%，52名）が，高校では行わない生徒（男子69.6%，87名，女子77.6%，66名）が非常に多い（表4）。本校におけるクラブ入部者が少ない理由としては，進学への意識の強さと学習時間確保が挙げられる。そのため，高等部では，中学時代は体育系クラブに所属していたが，本校へ入学してからはクラブに所属しない生徒が多く，身体を動かすのは体育の時間だけという生徒も少なくない。これが，二極化を生んでいるひとつの原因と考えられる。現在入部しているか否かに関わらず，大学へ進学後，体育系のクラブやサークルに入ることを希望している生徒が38.9%（137名）であり，高校時の入部率（27.6%，97名）に比べ，少し増加している。高校時に体育系クラブに所属出来なかった生徒が大学でまた運動をしたいと思っているからであろう。しかし，中学時の入部率（59.4%，209名）ほどには増えていないのは，一度運動から離れてしまうとまた始めることが難しいということではないだろうか（表4，表5-1，表5-2）。中学校，高等学校，そして大学でのクラブ活動が維持できるような，クラブ活動を続けながら大学入試に向かうことのできる学校としての体制を作ることが重要である。

また，大学でのクラブ，あるいはサークル活動に限らず，何らかの形でスポーツをやっけようと考えている生徒が，62.2%（219名）もいることは注目すべきところである（表6）。大学へ進学後，体育系のクラブやサークルに入ることを希望している生徒が38.9%（137名）であるから，23.3%（82名）がクラブやサークルに入らないが，スポーツをしていきたいと思っている生徒となる。理由では，「健康のため」が一番多く，続いて「身体を動かすのが好きだから」「ストレス発散のため」となっている（表7-1）。身体を動かすことの重要性を理解し，その楽しさや爽快感を感じたことがこの結果になっていることは，体育の授業における取り組み，すなわち選択授業がその効果を出したと考えられる。これは，選択授業に対する生徒からの回答からも裏付けられる（表1，表2，表3）。やりたくない理由の上位，「他にやりたいことがあるから」「めんどうくさいから」「時間的に無理だと思うから」を超えるぐらいに，スポーツの楽しさや爽快感を感じる事が出来れば，やりたくない生徒を減らしていくことができるに違いない。そのためには，高等学校のみならず，小学校，中学校からの取り組みが重要である。谷口は，「大学においても，生涯スポーツライフ設計の支援システムの充実が必要である」としている[16]。高等学校卒業後，スポーツをしたいと考える生徒が，大学でクラブやサークルに参加したいと考えている生徒以上に多いのであるから，大学のクラブやサークルだけに頼らず，地域のスポーツクラブに参加できるような，生涯スポーツへつながるシステムを作ることが，二極化を解消していくには重要になるだろう。

2つめの体力の低下については，本校でも大きな問題のひとつである。中学校，高等学校ともスポーツテストにおいて，ほとんどの種目で和歌山県の平均を下回っている。本校への受験のために学習塾へ通い，屋外で遊ぶ時間や運動する時間が少なくなっていることがその原因と考えられるが，このような状況では，卒業までにスポーツをより高いレベルで楽しむところへ引き上げることは難しい。具体的には，中学校，高等学校を問わず，バレーボールでサーブが相手コートまで届かない，手前からサーブを行う，ソフトボールではサードやショートからファーストまでボールが届かない，ランナーをためてからしかアウトがとれないなどの生徒が多い。ルールやゲーム運営などの工夫である程度楽しむことは出来るが，生徒のレベル差が大きく，すべての生徒が楽しむことは難しい。より多くの生徒が高いレベルのスポーツを楽しむためには，早い年齢から体力や運動能力をしっかりとつけていくことが大切である。生徒の意見の中にも，「もっと身体を動かしておけばよかった」「筋力をつけておけばよかった」が並んで多く出ており（表8），生徒たち自身も体力の低さを感じている。

また，「小学校，中学校，高等学校の体育でどんなことをやってほしかったか」の質問に対する回答の中にも，「基本的技術」「体操」「ストレッチ」「基礎的体力づくり」「体力UPシステム」「筋トレ」「体力づくり」「柔軟体操」「基礎体力」などの意見が多く出ている（表9）。特に小学校，中学校の低年齢時の取り組みに関

することが多く、その頃の運動に対する必要性を多く感じていることが伺える。合田らは、受験勉強によって十分な運動機会を得られないまま入学してくる生徒に対応するカリキュラムを研究する中で、「体力や運動能力の低下は、得意なスポーツ種目の偏りを生み、学習における到達目標の作成が容易ではない」と述べている[4][5]。その上で、スポーツテストのデータをもとに、単に体力や運動能力を高めるだけでなく、スポーツの生涯化をはかることのできるカリキュラムの作成を行っている。スポーツの楽しさや爽快感を感じるような楽しい内容、体力や運動能力を向上させるための内容の両方を限られた授業数の中で実施、両立させることは難しい。楽しい授業を考えた場合、体力や運動能力を向上させるためのトレーニングへの取り組みは、教員から少し敬遠されがちになる。体力や運動能力を向上させるためのトレーニングへの取り組みに重点を置くと、体育の授業がづらいものになり、体育嫌いの生徒を作りかねない。両方をうまく組み入れたカリキュラムを作ることが非常に大切である。これは、3つめの課題にも通じることである。

3つめは、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力として、運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識などが身についているかという点である。選択授業では、出来る限り生徒たちが自主的、積極的にスポーツに接していくように、準備、運営、後片付け、自己評価などを行い、運動への関心や自ら運動する意欲、各種運動の楽しさや喜びを引き出す工夫をしている。今回のアンケートでは、多くの生徒が選択授業を楽しいと感じ、さらにそのスポーツを継続してやっていきたいと答えている(表1、表3)。自分が選択した種目を実際に行い、さらにそれを継続してやっていきたいと思うことは、生涯スポーツにつながる大きな要因である。全体では78.1%の生徒が選択種目を継続してやりたいと感じており、生涯スポーツへつなぐ意味において、体育における選択授業が成果を出しているといえる。また、その基礎となる運動の技能や知識などを身につけることは、先の体力の低下の課題の中で述べたように、スポーツの楽しさを味わうことと並行して取り組まねばならない課題である。スポーツをより高いレベルで楽しんでいくためには、ゲームの最後までしっかり動くための持久力、より高い技能を習得するための筋力が重要になる。スポーツを楽しむ上で、基本的な能力や筋力をつけておけばよかったという結果は、生徒たち自身がスポーツをより深く楽しもうとする現れといえる。そのことが知識として理解されていることは、意味深いことである。

4つめの学習体験であるが、これについてもアンケートの中の「小学校、中学校、高校時代の体育の授業でこんなことをしておいてほしかったと思うことを自由に書いてください」という問いに対して、「多くの運動」「いろんな球技」「運動が好きになるもの」「幅広い球技」「団体スポーツ」「体育をもっと」「いろんな競技」などの意見が挙がっており、生徒たちも早い時期から様々なスポーツに接したかったと感じている。早い時期にさまざまなスポーツを経験し、その中から選択していくことは、生涯スポーツへつなげる意味で重要なことである。小学校でのそれらの取り組みと中学校、高等学校でのより専門的な種目への取り組みが、将来少なくとも1つのスポーツ継続していく基盤になっていくことは間違いない。施設の問題や教員の専門性の問題なども影響し、なかなかすべての希望に添えるように多くの種目を行なうことは困難であるが、多様化している生徒たちのニーズに応えていくことも大切である。

このアンケート結果から、さまざまな問題点が明らかとなった。まず、学校体育の選択制は、学校卒業後の生活にスポーツを取り入れる上でひとつの大きな役割を果たしていることが伺えた。しかし、そこへ至る過程の中で、基礎的な能力や体力をつけていくことがそのスポーツを楽しむ上で重要であるが十分に実施されていないことを、我々の経験だけでなく、生徒たちも感じていることが明らかとなった。日野らは、『生涯スポーツを志向する体育学習では「楽しい体育」が必要であるが、「手段的価値」が獲得されず、情緒的な楽しさを重視した放任学習になってはならず、「手段的価値」と「目的的価値」をトータルで考えることのできる「価値概念の統一化」を深める必要がある』としている[17]。単に生徒たちが楽しかったという感想で終わるのではなく、それぞれのスポーツが持っている特性を十分に理解し、より高いレベルでその楽しさに触れることができるように、基礎的な能力や体力をつけることも含めた体育の授業が望まれる。

III まとめ

今回の第I報では、生徒のアンケート分析を行い、学校体育の現状と生徒の体育に対しての思いを把握し、小学校、中学校、高等学校の校種間で連携の取れた体育のカリキュラムをつくるための注意点を明確にするこ

とを目的に検討を行った。生涯スポーツにつなげていくためには、生徒にいわゆる「体育嫌い」の意識を持たせずにスポーツの楽しさを感じさせることが重要である。また、スポーツを楽しむための基本的な運動能力や体力をつけさせていくことも学校体育の大きな役割である。今回の結果を踏まえ、今後は他校種の児童生徒のアンケート分析、実際に指導を行う教員のアンケート分析と、各学校で実際に作られた体育カリキュラムの検討をもとに本研究の目的であるカリキュラムの提案を行いたい。

参考文献

- [1] 川畑栄一, 深野 明, 小沢治夫 [他]「保健体育科中高六ヶ年一貫カリキュラムの検討：到達目標を中心として」筑波大学 研究報告 21, 271-294, 1981
- [2] 深野 明, 小沢治夫, 入江友生 [他]「中高六ヶ年一貫カリキュラムの検討 第2報：本校生徒の過去10ヶ年の体力・運動能力の変遷」筑波大学 研究報告 25, 119-134, 1985
- [3] 深野 明, 小沢治夫, 入江友生, 岡崎勝博, 合田浩二「中高六ヶ年一貫カリキュラムの検討（第3報）：到達目標を中心として」筑波大学 研究報告 26, 49-88, 1987
- [4] 合田浩二, 岡崎勝博, 小沢治夫 [他]「中・高6ヶ年一貫カリキュラムの再検討：体力測定から見た生徒の体力特性に応じたカリキュラムの設定（1年次）」筑波大学 研究報告 34, 139-147, 1994
- [5] 小沢治夫, 入江友生, 岡崎勝博 [他]「中高六ヶ年一貫カリキュラムの検討（第4報）」筑波大学 研究報告 35, 105-133, 1995
- [6] 合田浩二, 入江友生, 岡崎勝博, 小沢治夫, 加藤勇之助〈プロジェクト研究〉「6ヶ年一貫カリキュラムの構築：5年計画の1年次」筑波大学附属駒場論集 42, 119-147, 2003-03
- [7] 岡崎勝博, 入江友生, 合田浩二〈プロジェクト研究〉「6ヶ年一貫カリキュラムの構築に向けて：5年計画の4年次」筑波大学附属駒場論集 45, 115-141, 2006-04
- [8] 加藤勇之助, 入江友生, 合田浩二〈プロジェクト研究〉「6ヶ年一貫カリキュラムの構築に向けて：今後取り組むべき課題」筑波大学附属駒場論集 46, 123-139, 2007-03
- [9] 加藤勇之助, 入江友生, 合田浩二〈プロジェクト研究〉「6ヶ年一貫カリキュラムの構築に向けて（第2報）：61期（中1）体力データからの考察」筑波大学附属駒場論集 47, 139-144, 2008-03
- [10] 加藤 勇之助, 入江 友生, 合田 浩二〈プロジェクト研究〉「6ヶ年一貫教育カリキュラムの構築に向けて（第3報）：姿勢学習のカリキュラムについて」筑波大学附属駒場論集 48, 103-115, 2009-03
- [11] 加藤勇之助, 入江友生, 合田浩二〈プロジェクト研究〉「6ヶ年一貫教育カリキュラムの構築に向けて（第4報）：53～58期生徒の縦断的調査報告」筑波大学附属駒場論集 49, 91-112, 2010-03
- [12] 加藤勇之助, 入江友生, 合田浩二〈プロジェクト研究〉「6ヶ年一貫カリキュラムの構築に向けて(5)：本校61生中学3年間を振り返り」筑波大学附属駒場論集 50, 69-77, 2011-03
- [13] 後藤修平, 山本博男「生涯スポーツ時代に対応した小学校体育カリキュラムに関する一考察」日本体育学会大会号(46), 660, 1995-09-10
- [14] 高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編 文部科学省 平成21年7月
- [15] 平成20年度文部科学白書 文部科学省 第2部 第6章 第5節
- [16] 谷口こゆき「生涯スポーツへとつながる体育カリキュラムの模索」日本体育学会大会号(47), 594, 1996-08-25
- [17] 日野晃希, 長見 真「生涯スポーツを志向する体育学習における「手段的/目的的価値」の取り扱いに関する研究」～「楽しい体育」論を手がかりとして～ 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 12, 159-165, 2011-03-31

A Study of Physical Education Curriculum at a High School, a Junior High School and an Elementary School Leading to Lifelong Sports (Part I)
—Focusing on Teaching the Pleasure of Sports—
(From a Student's Questionnaire Analysis)

HASHIMOTO Yoshiyuki* and NAGAHAMA Akiko**

* *Wakayama High School Junior High School Attached to Kinki University Wakayama 640-8471, Japan*

** *Department of Practical School Education, Osaka Kyoiku University, Tennoji, Osaka 543-0054, Japan*

In this study, we have examined how physical education in schools can lead to lifelong involvement in sports. We suggest physical education curricula which encourage improvement as students progress from elementary school to high school. The purpose of this study is to suggest how physical education should be taught from now on. We, at first, conducted a survey to students, analyzed it, and clarified the important points in creating curricula. As a result, we came to the conclusion that it is necessary to have students experience various sports at an early stage of development and to make it clear to them how continuous physical education encourages them to progress. What counts is to create curricula which present the pleasure and have the students feel refreshed in elective physical education class, and train them in order to improve their strength and exercise capacity.

Key Words: lifelong sports, pleasant physical education, collaboration between elementary school, junior high school and high school